



ザ・クロマニオンズ 左から小林勝 (B), 甲本ヒロト (Vo), 真島昌利 (G), 桐田勝治 (Dr)

ミュージシャン 甲本ヒロトさん 真島昌利さん

今月号のインタビューは、ミュージシャンの甲本ヒロトさんと真島昌利さんです。ヴォーカリストの甲本さんと、ギタリストのマーシーこと真島さんは、1985年に「ザ・ブルーハーツ」を結成、1995年からは「ザ・ハイロウズ」として、そして現在は2006年より「ザ・クロマニオンズ」として精力的に活動されています。約30年もの長きにわたって第一線で活躍中のお二人に、名曲「リンダリンダ」の誕生秘話から「クロマニオンズ」の命名の由来まで、これまでのロックンロール人生をお聞きしてきました。

(聞き手・構成：西岡 毅)

ロックンロールとの出会いについて

—— まずは、お二人のロックンロールとの出会いについてお聞きしたいと思います。甲本さんは、中学1年生のとき、ラジオでマンフレッド・マンを聴いたのが音楽との出会いとお聞きました。

甲本：そう、とにかく聴いてびっくりしたんだ。それまでは音楽に興味がなかったので、その音楽に感動しているか分かるまで時間がかかったんだよね。音楽に感動するわけがないと思ってたから。でも他に原因が見当たらなかったんだ。目の前に畳があって、畳をかきむしってみたけど畳に感動するわけもないから、やっと音楽に感動したことに気付いたんだ。

—— そんなに唐突な出会いだったんですね。真島さんの

場合は、ビートルズのレコードを知り合いに聴かせてもらったんですね。懐かしいお話かと思いますけど。

真島：そうさのう…、あれは寒い日のことじゃった。

—— 40年くらい前ですかね (笑)。

真島：友達の家遊びに行ったら友達がレコードを聴いていて。ビートルズって格好いいから聴いてみなよって言われて聴いてみたんだよね。音楽が格好いいと思ったことは今まで一度もなくて、それまでは野球や零戦とかが格好いいと思ってたんだけど、ビートルズの「Twist and Shout」という曲でしびれたんだよね。ビーンと。

—— ビーンときたんですね。たしか日本の編集盤で曲順が違ったんですね。

真島：そう、詳しいね (笑)。「ステレオ！これがビー

トルズ ボリューム1」っていうアルバム。

——その体験の後、お二人はロックンロールに傾倒されるわけですか。

甲本：そうだね。

真島：自分はすぐギターを買いに行ったね。

——甲本さんはバンドを始めるまでに時間が空いたんですよね。

甲本：はい、僕はまさか自分がバンドをやるとは思っていなかったんでびっくりで。聴いて気持ち良かったので、そのまま聴き続けようと思ったんだ。聴かせる側に回ろうとは思ってなかった。

——友人からのお誘いがきっかけで、バンドをやる側にしようと思ったんですか。

甲本：でも実は意識変革はあったんだよ。パンクロックを聴いたときに自分がそちらに回るヴィジョンというか、可能性が見えたんだよね。あの時のパンクロック全般の空気というか、雰囲気というか。パンクロックというけど、あれは、僕らの世代、1977年型のロックンロールなんだ。たまたまりアルタイムで感じられたのが大きかったんだと思う。

——私事ですが、私の場合、1980年代の中学生の頃にお二人の歌を聴いて感動してバンドを始めたんですが、ある記事でお二人がラモーنزの「電撃バップ」という曲を真島さんの誕生日のために演奏したと読んで、それからラモーنزを聴き始めて、ラモーنزの曲名からバンド名を取って「ピンヘッド」というバンドをやっていたんです。それが私のロックンロール体験ということになります。

甲本：そうかあ、なかなかの経歴の持ち主だね。

——そういった中で、この前、お二人がクロマニヨンズとして清涼飲料水のCMで「電撃バップ」をカバーされているのを見て、自分の音楽人生が一周したなと思って…。すみません、自分の語りが長くなりました。

甲本：いやいや、面白いのでどんどん語って（笑）。

——ありがとうございます（笑）。お話を戻すと、当時、音楽情報はあまりないと思うんですが、どうやって新しい音楽に出会われたんですか。

甲本：僕はライナーノーツ。国内盤には必ず説明書きみたいに入ってる。あとはロック雑誌を読んだり、ラジオを聴いたり。

——今のようにインターネットで探すこともできないでしょうから、音楽探しは手探りでしたか。

甲本：そうだね。あとはジャケ買い（*アルバムのジャケットだけを見て買うこと）。でも、当時は1枚2,500円もしたので中学生には勇気が必要だった。買ったものは何とか失敗と思わないように、好きになろうと思って一生懸命聴いたりして。

真島：僕はビートルズ好きの友人が周りにいたので、ビートルズが好きになって色々知りたくなって。ビートルズの本を読んでいると色々と別のバンドの名前が出てくるんだよね。

——今はインターネットですぐ映像が見られますが、当時は映像を見る機会もあまりなかったんでしょうか。

甲本：（しみじみと）なかったねえ。フィルムコンサートとかあったぐらいで。

真島：動くロックの人を見られることがなかったからね。

甲本：テレビでエレキギターを持っている人が出てるだけで見てたよ。

真島：そうそう。ギターを持ったらジャンルは何でもよくて。指づかいを見てた。

——ファッションの真似はしてましたか。

真島：自分で服を作ったりしたよ。今はさ、専門店に行けばパンクセッソー式って買えるでしょ。当時はそういうお店がなかったから自分でスプレー買って安全ピンをつけてね。だっさいよ（笑）。今見たらすごいだっさい格好で、格好つけて街を歩いてたなあ。

——そういう格好で歩いている人ってあまりいなかったんでしょうね。

甲本：全然いなかったなあ。おかしい人だと思われてた（笑）。

真島：ロック聴いてた人はいたけど、パンクは流行ってなかったんだよね。

甲本：パンク聴いてるっていうと馬鹿にされたもんね。

真島：うん。同じロック好きな人からも馬鹿にされたな。

甲本：あんなもんよく小遣いで買うよねって言われてた。ゲテモノ扱い。

——「ピストルズ」とか「クラッシュ」とか「ダムド」とかの著名なパンクバンドも流行ってなかったんですか。

甲本：「ダムド」とか誰も知らなかったもん。

真島：音楽雑誌にも「ダムネッド」って書いてあった。
——確かに「ダムド」は綴りが「The Damned」なので
そう読めますね（笑）。ところで、当時、英語の歌詞はどう
いう風に理解していたんですか。

甲本：最初聴いたときは歌詞なんてどうでも良かった
んだよ。

真島：当時は訳がついてたけど、その正確さなんて
「ダムネッド」で推して知るべし（笑）。

甲本：僕は英語の歌詞をしっかり理解してたわけじ
ゃない。

——先ほどのファッションの話に戻りますが、当時の甲本
さんは、革ジャンを裸で着てライブをやって洗濯機で洗っ
ていたという記事を読んだことがあるのですが。

甲本：うん、コインランドリーで丸々洗ってた。あの頃
の革ジャンは今でも持ってるよ。バリバリの紙みたいにな
ってる（笑）。

——ちなみに今はステージ衣装ってあるんですか。

真島：一応はあるよ。ステージ衣装で街を歩いていた
ら大変なことになるので。

甲本：そんなにたいしたものじゃないけど。でも、僕は
ステージでTシャツ履いたりするんだけど（*上半身用の
Tシャツを下半身に着るということ）、博多の街中でTシャツ
を履いてる子どもを見かけたなあ。僕は人からああいう
風に見られてるんだと分かった（笑）。

二人の出会いについて

——次はお二人の出会いについてお聞きしたいと思います。

甲本さんはコーツ、真島さんはブレイカーズというバンドを
組まれていたところ、それぞれが解散して、一緒にバンドを
始めたんですね。

甲本：当時住みついてた工場跡で一緒に激しく飲んで
たら、マーシーがバンドやろうと言ったんだ。僕はブレ
イカーズが解散したことを知らなかったのが最初冗談
かと思って。セッションはそれまでにもしてたんだけど、
ブレイカーズが解散したという話を聞いて、じわじわと、
この人は本気なのかと思った。

——お二人がバンドを結成した直後に、テレビを見てる甲
本さんに怒って真島さんがテレビを捨てたという有名な話

があるんですが、真相はいかがですか。

甲本：本当の話だからなあ（笑）。見てる最中にブチッ
とコードを抜かれて。

真島：（笑）。ミーティングをやろうという話だったんだ
よね。バンドを始めるにあたってどういうことをやりた
いのかといった意思確認をしようと。それなのに「ちょ
っと待って、この番組が終わってから」っていうもんだ
から。バッテンロボ丸って番組（笑）。

甲本：面白いんだよ、バッテンロボ丸（笑）。当時、
自分のバンドを解散した後に自暴自棄な時期があって
投げやりで。あと、マーシーが言うバンドというものを
どこまで真剣に受け止めてるかというのがあやふやな時
期でもあったから。でも、一番の理由はバッテンロボ丸
がめちゃくちゃ面白かったから（笑）。

——（笑）。それで、見ている最中にブチッとコードを抜か
れてケンカにならなかったんですか。

甲本：僕に対してそこまで真剣に怒る人を見たことが
なかったので、真剣なんだ、本気なんだというのが、
その瞬間、何も言わなくても分かったんだよ。

——テレビを撤去した後はバンドについて話し合いをした
んですか。

真島：その後の記憶はないなあ。

甲本：うん、その後の記憶はないけど、その夜に曲を
作ったことは覚えてる。

——何の曲か覚えてますか。

甲本：「リンダリンダ」と「ブルーハーツのテーマ」。
バンドを始めるにあたって、今日は悪いことしたなあと思
って、勢いつくような曲をね。バンドのためになるよう
な曲が何かないかなと。

——その2曲ができたというのはいつ真島さんに伝えたん
ですか。

甲本：次の日だよ。『できた！できた！』ってね。

——曲はどうやって伝えるんですか。デモテープとか作っ
てないですね。

甲本：ヘッタクソのギターとアカペラで。

——歌詞も完成してるんですか。

甲本：もちろん、もちろん。メロディーだけではなく、
歌詞だけでもなく、「歌」の形。例えばさ、「チーチー
パッパ チーパッパ 雀の学校の先生は〜」（*音程付き

で歌う) ってあるでしょ。これは歌でしょ。でも、ただの歌詞の朗読だと、これは歌じゃないでしょ。僕の場合は、ちゃんと「歌」にしてから。

—— 真島さんは、最初に「リンダリンダ」を聴いたときのことは覚えていますか。

真島：覚えてない (笑)。

—— 私は当時、ブルーハーツを浴びるように聴いていたとき、あまり深くは歌詞の意味を考えてませんでした。それが最近、ふと「リンダって誰？」と思ったりしたんですが、どういう意味なんでしょうか。

甲本：僕も分からない。答えとか元々ないんだよ。だから、リンダリンダって歌詞カードには書いてないでしょ。登録もしてないから自由に歌っていいんだよ。

—— お二人はそれぞれ曲を作ってますが、お互いが作った歌詞の意味を尋ねたりしますか。

真島：聞かないね。

甲本：僕も聞かない。

—— 甲本さんの場合、真島さん作の曲を歌うことも多いわけですね。人が作った歌を歌うのはどんな気持ちでしたか。

甲本：僕はコピーバンドをやったことがなかったんで、ずっと自分で作った歌しか歌ったことがなかったんだ。それが、マーシーの曲を歌うことになったのは、マーシーがやっていたブレイカーズの曲が好きだったから。でも実際に歌ってみると、最初は慣れないんだよね、人の歌を歌うのは。夜中に出かけては、マーシーの曲を大きな声で歌って散歩したりしてたよ。自分のものにしようと思って。

—— なるほど、そうなんですね。そうやってバンドを始めるにあたり、真島さんのブレイカーズの曲はやらずに甲本さんのやっていたコーツの曲はやろうということになったとお聞きしましたが。

甲本：僕はコーツ時代の曲もやりたくなかったんだ。

—— 真島さんが説得したんですか。

真島：単純にいい歌だったからね。

—— どんな曲でしたか。

二人：「人にやさしく」、「NO NO NO」、「ロマンチック」とか。結構あったね。

—— ブレイカーズ時代の曲はその後、発表されてないんですか。

真島：それは形を変えて出てきてたりはするよ。レコードを作るってゼロから曲を作るわけじゃなくてさ。長い曲だと40年かかってできましたって曲もあるわけで。自分の中にメロディと言葉がずっとあったりして。

—— そういった出会いから30年くらい経つと思いますが、お二人は家族みたいな関係なんでしょうか。プライベートでも仲が良いとお聞きしますが。

甲本：分からないな…。自分だけ分かってなくて、マーシーだけ分かってるってこともないと思う (笑)。

真島：(笑)。

—— お二人はケンカをすることはないですか。

甲本：細かいしょうもないケンカはあるよ。

真島：ケンカというより意見の相違かな。口喧嘩はしないね。取っ組み合いのケンカはなおさらしない (笑)。

甲本：ロックンロールという大きなものがあるので、他は細かい瑣末なものなんだ。

メジャーデビュー後の音楽活動について

—— ブルーハーツが1985年から、ハイロウズが1995年からと、それぞれ10年ほど一緒にバンドをされて、さらに2006年にはクロマニオンズを結成されていますが、自分たちの過去のバンドの作品を振り返って聴くことはありますか。

二人：ないねえ。

—— 現在のバンドのクロマニオンズのアルバムを聴くことはありますか。

真島：聴くとしたら、ツアー前に曲全体の感じを思い起こすために聴くくらい。

甲本：セルフコピーするんだよね。

—— ブルーハーツやハイロウズの昔の曲をステージでやることはないですか。

甲本：ないね。新曲をやりたい。

—— お二人はどうやって歌を作るんですか。

甲本：色々だけど、基本は何も持たずに鼻歌で作る。でも、ある段階から急にギターを持って仕上げたり。本当に適当。作ったというのか、できたというのか…。

真島：僕もギターを持ってないときもあるし。曲を作ろうというカタがないから。だいたい寝る前の眠いときに思いつくんだよね。そこでこのまま寝ちゃうかカセット

に吹き込むか葛藤がある。でも、だいたい寝ちゃって、結局、寝るとすっかり忘れちゃう（笑）。

——歌詞帳に書いたりはするんですか。

甲本：僕は書かない。

真島：僕は書き留める。そうしないと忘れちゃうから。最近、特にその傾向が強い（笑）。

——真島さんの場合、自分で歌う曲と甲本さんに歌ってもらう曲とで、曲の書き方が変わったりするんですか。

真島：それはないね。歌を作るときは誰が歌うというのは関係ないなあ。自分で歌うのは何となく決まるわけで、何となく「オレ歌うわ」っていう感じで。

——お二人は、2006年からは、クロマニオンズというバンドを結成されています。バンド名の由来ですが、お二人がバンド名について相談されている時、甲本さんが「クロマニオンズ」と言ったところ、真島さんがポケットから紙を出したら、その紙に「クロマニオンズ」と書いてあったというのは本当ですか。

甲本：よく手品であるじゃない。でも、僕らしかその場にいなかったけど、これは本当に起こったことなんだ。

真島：イリュージョン（笑）。

——（笑）。2006年にクロマニオンズを結成されてるので8年経ってることになりますが、アルバムも年に1枚程度出されてますね。普段の生活はライブの後に曲を作ってレコーディングしてということですか。

甲本：そうだね。ツアーが終わって2週間たったらスタジオ入ってる。

——レコーディングのときに曲を持ち寄るということなんですけど、シングル曲はどうやって決めるんですか。

真島：他人任せだね。

甲本：だって全部の曲がいいんだよ。アルバムを代表する曲があるわけじゃない。

——私事ですが、私は、司法試験に合格した時、ある科目が合格基準点ギリギリだったんです。そのときに、丁度発売されていたクロマニオンズのシングル曲が「ギリギリガガンガン」だったんです。あの歌は、今日は最高の気分だっていう歌詞じゃないですか。もしかして、あれは司法試験に合格した私のために書いてくれたのかと。

真島：あなたのために、あなただけのために書いた（笑）。

——良かった、それを確認したかったんです（笑）。次に

ツアーについてなんですが、フェスと単独ライブの違いはありますか。

真島：ステージに出てライブパフォーマンスすることはどこでも一緒だね。

——3つのバンドを経て、ライブのやり方は変わってきていますか。

真島：毎回ステージの前にトイレに行くというのは変わらない。

甲本：行けないと気持ち悪いんだよな（笑）。

——ステージを長年こなしているのに、ライブの時に緊張することはないでしょうか。

真島：毎回緊張するよ。緊張するからトイレに行くんだよね（笑）。

——30年もライブをやっている、それでも緊張されるんですね。

甲本：人がいっぱいいるところに行くだけでも緊張するよ。あんなところに出て行ってさ。でも、ライブがとびきり緊張するのは、やっぱり好きだから、大切だからじゃないかな。浅田真央ちゃんがトリプルアクセル飛ぶのと同じじゃないかな。「決めてやるぞっ」というのがどこかにあるんじゃないかな（笑）。

——それだけ真剣でいらっしゃるんですね。ステージの前にお酒は飲まないですか。

甲本：僕は飲まない。

真島：僕はそのうち飲みそうな予感がある（笑）。二日酔いというのも前はたまにあったけど、学習したから今はない。

——ライブ終わってご飯食べに行かれたりしますか。

甲本：うん、楽しいよ～（笑）。

——どんな話をされるんですか。

甲本：あまり音楽やツアーの話にはならなくて、基本は馬鹿話。

真島：ステージで転んだとか曲順間違えたっていう突っ込みはあるけど。

甲本：曲順を間違えるのは僕だ。でっかい声で「次の曲は〇〇でーす」って叫んだら違ってて（笑）。

真島：他のメンバーは大爆笑。

甲本：そんなときは、お客さんに説明して前の曲のエンディングまで戻してやり直す（笑）。



ゼロから作るわけじゃなくてさ、40年かかってできましたって曲もあるわけで。自分の中にメロディと言葉がずっとあったりして。 真島昌利

ライブがとびきり緊張するのは、やっぱり好きだから、大切だからじゃないかな。「決めてやるぞっ」というのがどこかにあるんじゃないかな。 甲本ヒロト

プライベートについて

——レコーディングやライブがないときも二人で会ったりされているんですか。

甲本：一緒にレコード店巡りはやってるよ。本当楽しいんだよね。

——まとめて大人買いされるんですか。

甲本：うん、たくさん買うこともたまにあるね。それだけ欲しいものがあつた、欲しいものにたくさん出会えたってことは、幸せなことなんだよ。

——レコードの帯や内袋もとってありますか。

甲本：うん。帯はうたい文句がいいんだよ。昔は激しいことが書いてあつた。

真島：例えば、ジャム（*ポール・ウェラーがヴォーカルを務めるバンド）の1stアルバムの宣伝文句は、「ニューウェーブはギリギリの線で勝負をかける男のロック。」

だった（笑）。

——カッコいいですね（笑）。ポール・ウェラーと言えば、私は、フジロックのために来日したポール・ウェラーを空港で見かけて、話しかけたらいきなりハグされまして。記念写真を撮らせてもらってお別れしたんですが、写真を確認したら綺麗に写ってなくて。失礼とは思いつつ、もう一度追いかけて、思い切って再度の撮影をお願いしたら快諾していただけたというのが印象的でした。

甲本：ギリギリの線で勝負をかけた男の写真だ（笑）。

——（笑）。ところで、お二人は運動されたりはしていますか。

二人：運動してないね。

——ミック・ジャガーとかですと、来日時に皇居の周りを走ったなんてニュースがありました。

甲本：うん、彼はすごいよ。僕もそのうち走ろうかな。

——お二人は、食事は気をつけていらっしゃいますか。

二人：特に気をつけてないね。

—— 真島さんはカレーがお好きなんですよ。25年ぐらい前に、地方のレコード店で真島さんがアコースティックギターの弾き語りをされたのを私は観に行っていたことがあるんです。そのとき司会者が無茶ぶりで真島さんにダジャレを披露するよう迫ったんですが、真島さんは「カレーはかわいい(*辛い)」とおっしゃっていました(笑)。

真島：覚えてない(笑)。それは、今、すぐに、忘れて(笑)。

—— 年齢を意識することはありますか。

真島：誕生日のときぐらいかな。ケーキの上に何歳っていう数字がたってる。

甲本：ロウソクを一本ずつ刺すとすごいことになるから数字なんだよ。

—— 年をとって良かったとか悪かったとかってこともないですか。

真島：映画が割引になるところとか。あとは、そのうち都バスがただになるから楽しみかな。

甲本：美術館も安くなったりするんだよね。嬉しいなあ。

弁護士、弁護士会について

—— (笑)。最後の話題として、弁護士会から来ているので法律関連のことも聞かせてください。パンクロックというと、ルールを破るというか、法律の対立概念のようなイメージもありますが、その辺りいかがでしょうか。パンクバンドのクラッシュの曲には「I Fought The Law」(*法律と戦った)なんて歌もありました。

甲本：パンクロックと法律かあ、その答えは難しいなあ(笑)。ちなみにあれはクラッシュの曲じゃないから。

真島：うん、カバー曲だね。

—— 失礼しました(笑)。でも、やっぱり弁護士会というあまり馴染みがないでしょうか。

真島：そうだね、弁護士会っていうのは弁護士になったら入る必要があるのかな。

—— そうなんです。必ずどこかの弁護士会に入らなければいけないです。

甲本：じゃあ、「ブラック・ジャック」みたいなのはいないんだね。

—— それは非弁と言いまして、取り締まりの対象です。弁護士のイメージといういかがですか。

甲本：とりあえずお勉強できるっていうイメージはあるね(笑)。弁護士会の中で、弁護士同士のやり合いというものもあるの？

—— はい、色々な弁護士が集まっていますので、どうしても意見の相違はあります。会としてそれをまとめるのは大変です。

真島：弁護士のやり取りはすごそうだね。今の発言は脅迫だぞとか(笑)。

甲本：でも、やり取りの中で真実が見えてくるんでしょ。ディベートの世界だ。

—— 今日は、せっかくですので、弁護士会という存在を覚えておいてください。

甲本：今後、弁護士にお世話になることもあるかもしれないので。逮捕されたら、どんどん弁護していただいて。

真島：僕らのやること、全てを弁護してもらおう。

—— もちろんです。弁護士は依頼者の味方なので、全力でやらせていただきます。最後に、今日は東弁のグッズをお持ちしましたので、是非ともお使いください。マグネットやペンがあるんですよ。これが東京弁護士会のロゴなんです。全て非売品です。

甲本：おお～、いいじゃないか。シンプルで良いね。

真島：やったー。レアなグッズだ。可愛い。

—— ありがとうございます。本日は、長い時間、本当にありがとうございました。

プロフィール ザ・クロマニヨンズ

甲本ヒロト (Vo) と真島昌利 (G) を中心に結成。小林勝 (B) と桐田勝治 (Dr) を加えた4人組で2006年9月、デビューシングル「タリホー」を発表する。その後もリリースを重ねながら年間を通してコンスタントにツアーを敢行。数々のフェスにも出演し、ロックファンを熱狂させ続けている。2014年4月9日、バンド初のシングル・コレクション「13 PEBBLES ～ Single Collection～」の発売を皮切りに、5月14日「20 FLAKES ～ Coupling Collection～」、6月25日「16 NUGGETS ～ Music Video Collection～」をリリース、その後8月6日にNEW SINGLE、9月24日にはNEW ALBUMをリリースする予定。